白梅学園大学・短期大学紀要　43：1～19（2007）

『匡衡集』小考

――和泉式部歌集所収二歌群との関連をめぐって――

久保木　寿子

はじめに

『赤染衛門集全釈』[1]（共著）に次いで『匡衡集全釈』[2]（単著・以下『全釈』）の公刊を果たされた林マリヤ氏は、その注釈作業の過程の中で、先ず、「和泉式部と大江匡衡」[3]と題する論文の形で、『匡衡集』と『和泉式部集』中のいわゆる「観身論命歌群」および『和泉式部続集』「日次歌群」とを緊密に関係づける斬新な見解を提示された。即ち和歌相互の対応の観点から、『匡衡集』巻末に置かれた十四首が、和泉式部の和歌、就中、前記両歌群に「宛て」て詠まれたものであり、さらに晩年の匡衡と和泉が疑似恋愛関係とでも言うべき間柄にあったことを主張されたのであった。『全釈』では、前記論文に多少の修正を加えつつ、この観点から一首一首の詳解を示しておられる。

事は晩年の匡衡の閲歴に関わるのみならず、和泉式部の閲歴および和泉両歌群の成立にも及ぶ問題である。もし匡衡の歌が、和泉両歌群「宛て」に詠まれたという氏の論が成り立つとすれば、匡衡の没年が寛弘九年（一〇一二）七月一六日であることから、当然和泉式部の両歌群の成立時期はそれ以前に絞られる。殊にも議論百出の状況にある日次歌群の成立下限が寛弘八年末までに押さえられれば、それ以降の成立とする論[4]は、拙論を含め修正を迫られることになる。

この林氏の御論については、後藤祥子氏[5]が、「観身論命歌群」に応じた匡衡の歌の「発見」（和歌文学大系月報9）として好意的に迎えられ、一方、藤岡忠美氏[6]は、細かな論証は今後の検討課題としながらも、「日次歌群の冒頭を対象とする所説であるが、新しい外部徴証に拠ったものとして注目されよう」とされている。

本稿では、林氏の論拠となっている『匡衡集』末尾十四首と和泉式部の両歌群の関連について改めて検証し、結果として和泉式部の二歌群からの直接的な承接関係は認めがたいことを述べたい。『匡衡集』の数首について新たな私解を示すことで、幾分かでも生産性のある論にしたいと思う。また和泉の詠歌環境の一半に関わる問題として切り込むべく、その可能性を窺いたい。以下、和歌本文・歌番号（『匡衡集』のみ算用数字で示す）は、『新編国歌大観』に基づく。

『匡衡集』の構成に関するこれまでの諸家の見解は、雑纂的、

草稿本的と見る初期のもの[7]から、斉藤熙子[8]氏による便宜的四区分、北村杏子[9]氏による、個別の歌の詠作年次を確定する作業を踏まえた、大凡の年代順配列による四区分説へと推移してきた。北村説によれば、次のようになる。

第一群　1～10　匡衡、若年時歌群
第二群　11～60　赤染衛門との贈答歌群
第三群　61～87　赤染衛門との結婚生活時代
第四群　88～113　雑纂的部分

総じて雑纂的要素、杜撰さが残ることを認めた上での区分である。特に最終第四群は、『赤染衛門集』との重複もなく、贈答相手を特定できないまま一括処理されてきた。北村氏は、これを「(前の)三群に入らない歌」で、最終歌は「人生の終末を予感」し、年代順編纂の「最後の締めくくり」となるものとしている。

これに対して林氏は、第四歌群をも、他群と同一の論理の下に統一的に読み取るべく、これを二分(第七群87―99、第八群100―114)し、とりわけこの最後の十四首を、和泉式部との関連歌群として明確化しようとされたのであった。

氏はすでに、『匡衡集』から見た大江匡衡の素顔[10]」と題する論で、各歌の詠作年次・人物関係を確認しつつ、『匡衡集』の「二つの編纂方法」について言及されていた。「ほぼ年代順に編纂」する方法と、「それを超えて、歌の対象相手ごとにまとめる」方法が併存するという主張である。今時の論文[11]では、各歌群の最初には新たな人物の紹介の詞書が付されていると見て、これを八群に分けている。これが歌群として人物毎に截然と分けられるものかどうか、集全体に渡る人物表記の整理検討の要があろうが、今は措く。本稿で問題とするのは、『匡衡集』最後尾におかれ、それゆえ匡衡晩年の歌群と位置づけられた、氏の言わゆる第八歌群100～113の一四首である。この歌群は、他の歌群が返歌をも包摂するのに対し、相手の歌を載せない「方針」を採るという。その内容は次のように説かれている。

(1) 100・101の二首―新たな人物紹介とも言うべき二首
(2) 102～104の三首―和泉「観身論命歌群」(二六八～二一〇)に「宛てた」歌群
(3) 105～113の九首―和泉「続集日次歌群」(五七六～六四七)に「宛てた」歌群

ここで氏が「宛てた」という意味は必ずしも分明ではないが、＜既にある和泉の歌群の歌を見て、それに返歌の如く対応した＞という事と理解して論を進める。

一、「うちわたりの人」は和泉式部か
―『匡衡集』100・101歌の検討―

林氏の論の大前提となるのが、「人物を紹介する」詞書を持つ第八歌群の冒頭100・101の歌である。この二首により、以下の匡衡歌がすべて出仕後の和泉に関連づけられることになる。

①　うちわたりの人に、やまぶきにさして
100　九重にへだてしつきのさまかへてひとへにたのむやまぶきの花

先ず、歌群冒頭の新たな人物紹介が「うちわたりの人」として示され、これに和泉式部を比定する可能性が述べられる。では和泉出仕後の何時、この歌は詠まれたことになるのだろうか。林氏は、和泉式部が初出仕したとされる寛弘六年のことと推定している。また参考として、和泉続集の次の歌（当該の和泉二歌群とは直接関わらない）を挙げている。

ひさしうおとせぬ人の款冬につけて、ひごろのつみはゆるせとて、おこせたれば
とへとしもおもはぬ八重の山吹をゆるすといはばをりにこんとや　（続集一・集一五八）

「（匡衡の歌が）「九重」「一重」の対比であるのに対し、「十重」と「八重」で答えているので（和泉続集一の歌が）100の返歌の可能性もある」というのだが、如何であろうか。

山吹に挿して歌を贈る行為も、山吹の花を「八重」「一重」「九重」などの修辞により詠むことも、当代においてそれ程特殊なことではない。しかし、匡衡が「うちわたりの人」に贈った山吹は、和歌からして一重山吹であったと見られる。一方、和泉の歌は、八重山吹に対する返しの歌である。そもそも物が違う。また和泉の「返歌」には、「贈歌」中の「九重（宮中）」「月」に対応することばは全くない。当代の贈答歌の作法にここまで[12]則さない以上、両歌は無関係であり氏の言われる「返歌の可能性」はないのではなかろうか。

さらに問題なのは、匡衡歌の上句中の「（九重にへだてし月の）さまかへて」である。「今までは疎遠にしていたが、これからは親しくなってもらいたい」と語釈が施されているが、この宮仕えする「人」と匡衡の関わりは「さまをかへ」る事を願うに至るまで、既に宮中にあって、ある程度の「へだてし」時間の経過があったことになる。和泉の歌の詞書を勘案するとすれば、更に時間の経過を見込まなければならないであろう。

和泉式部集の次の歌に注目したい。

祭のひ、御前に人ずくなにてさぶらふに、葵に御てならひをせさせ給ひて
ゆふかけておもはざりせばあふひぐさしめのほかにぞ人をきかまし　（集四五五）

おほむかへしきこえむもはゆければ、ゆふを御み丁のかたびらにゆひつけてたちぬ
しめのうちをなれざりしよりゆふだすき心はきみにかけてしもの　（集四五六）

和泉の出仕間もない頃の歌で、その時期が葵祭に近い頃であったことが分かる。もし100歌が和泉に宛てたものだとすれば、晩春の花「山吹」の歌を男から受け取るまでに、既に一定の「経過」を経ていなければならないことになるが、ここにそのような時間的な余裕を想定できるであろうか。100歌を出仕の年の贈歌と

するのには、かなりの無理がある。

寛弘六年から七年の時期、匡衡が極めて多忙であったことは、諸家の指摘[13]するところである。寛弘六年正月、願った美濃国は叶わず、匡衡は尾張守に再任された。着任は十月二八日である（『類従符宣抄』巻八）。赤染衛門共々の下向であった。この間、三月には文章博士に再度任ぜられている（『二中歴』第二）。以降、三品九卿を望見しつつ、頻繁に各種詩宴に加わり、翌年二月には待望の式部大輔を兼務している。尾張赴任後は、『学令』に従い学校院を興す（「今、東曹末儒江侍郎、思郷貢以興学校院」（「冬日、於州廟賦詩」小序、『江吏部集』中巻）など、儒者且つ国守としての責務を全うするべく努めている。その詩の一節には「洛下親朋、莫抛我」の句を見ることができる。上り七日下り四日（延喜式）の京との往還にも身を酷使するうちに、寛弘七年二月、式部大輔（本朝続文粋6）、三月三〇日には、病を得た女婿業遠の後を受け丹波守に遷任となる（『御堂関白記』同日条「以尾張守匡衡遷任。件朝臣御博士、任遠国難候朝夕。又兼式部大輔、往還遠国。仍改任」）。この割注は、尾張在任中の匡衡の往還の困難さと多忙さを裏付けるものである。上京はこれ以降、五月四日開始の道長三十講（『赤染衛門集』二四八詞書）以前ということになる。四月一〇日には業遠が没している。諸事に忙殺されたことが予測される。

このように見てくるならば、寛弘六・七年に、擬似的にしろ「うちわたりの人」和泉との恋愛関係を図る余裕など無かったのではなかろうか。

次に、林氏が「うちわたりの人」に和泉を比定する有力な傍証として挙げる、『麗花集』巻七「恋」所収の歌について述べたい。

人にものいひはべりて、まさひらのうちにある人の、ア
いみじうおもひしのびけるころ、しのびたる人の、イ「ひまあらばいかで」といひたりければ
つのくにのこやとも人をいふべきにひまこそなけれあしのやへぶき　（麗花集八七）

言うまでもなく、「つのくにの」の歌は和泉の歌（集六九〇、後拾遺・恋二）である。これをア「うちにある人」の詠とするのが林説である。

又、氏は「ひまあらばいかで」と言ったイ「しのびたる人」を匡衡とする。匡衡が「内（内裏）」に在った和泉を誘ったと解し、先の「うちわたりの人」に和泉を比定するのである。確かに久曽神昇説[14]の「うち」を「家」とする解は、当時の語法としてはやや馴染まない感はあろう。しかし「まさひらの」を主格として扱った場合、「うちにある人の」が宙に浮き、「人に」とでもしない限り文法的に成り立たない。その場合でも、何故最初から「うちにある人にものいひはべりて」とせず、二重に説明する形にしたのか。また、「まさひらの」が主格であるならば、敢えて「（しのびたる）人の」と重ねて記す必要は全くないであろう。詞書中の人物関係が錯綜するのは、「まさひら」

と「しのびたる人」とが別人だからである。以上のことから、むしろ「うち」に多義性を認めて、身内・家内など匡衡の「家の内にある者」の意でこのように記したと取る従来の解が穏当だと思われる。

そもそも詞書の解釈云々の前に、『麗花集』の成立の問題がある。集中の作者の官位表記から、公任の中納言在任中が下限とされ、久曽神説では、寛弘二年六月―寛弘六年三月（四日『公卿補任』）の間、恐らく寛弘五年の成立であろうとする。これが現在の通説である。したがってこの歌は、最も下っても寛弘六年三月四日以前の詠であり、同年春の終わりごろに出仕したと想定される和泉を、「うちにある人」とする説とは整合しないことになる。

人物紹介が歌群の最初に置かれるとする論理に従えば、この「第八歌群」全体が、和泉式部関係歌群ではないことが証明されたことになってしまうのである。

次に、101について検討する。

②　又、女に

101恋すてふ名は高砂にたちぬれど尾上のまつといふ人のなき

当歌との関係が指摘される和泉の歌は次の通りである。

月あかき夜、人のきて、消息いはせたるに

よそにのみ雲ゐの月にさそはれてまつといはぬがきたるたれなり　（続集　三〇）

（重出）　月のあかき夜、人のきて消息いひいれたる

よそにみる雲ゐの月にさそはれてまつといはぬにきたるなりけり　（続集四三〇）

「まつといふ」が共通することから、101と和泉の歌が贈答歌であるといえるであろうか。101の主題は「無き名立つ」に属するが、和泉の歌はこれとは無縁。101には「月夜」の要素がなく（前歌100の「月」を引くのは強引）、後者には「高砂の松」の要素がない。両首の趣向は全く異なると言わざるを得ない。

個別の詠歌状況・寄せる景物の違いを無視しては、何でも贈答歌と言うことになりかねない。『和泉式部日記』[15]等にも顕著なように、心と物の対応、贈答歌の対応の作法・約束事は強く意識されていたであろう。「宛て」るとは、そのあたりの許容度が高いことを意味するのであろうか。また、101上句から「和泉と匡衡のことが評判になった」とされるのは、従来の儒者匡衡像を覆す新見ともなろうが、『赤染衛門集』にもその痕跡はなく「評判」の記事を知らない。

以上二首の検討からは、第八歌群を〈和泉との交渉の事実を表す歌群と見る〉という大前提そのものが、極めて危うい推測に基づいたものと言わざるを得ない。もし仮に以下に見る和泉二歌群と匡衡歌の表現上の類似関係が確認されたとしても、両者の直接的交渉の事実云々とは全く別の問題である。

二、『匡衡集』と和泉「観身論命」歌群のかかわり
―『匡衡集』102～104歌の検討―

見てきたような次第で、以下は、『匡衡集』歌と和泉の二歌群に関する表現上の直接的な影響関係の考察ということになる。

『匡衡集』第八群102・103・104と「観身論命」歌群（四十三首）の関連について見ていく。

③　ものいみにて、つれづれに侍るに

102 塵かくすさきの契りしふかければつながぬふねののどけからまし（五百塵点劫も前の世からの因縁が深かったら、繋いでいない舟〈のようなあなた〉も安心でしょうが）

103 いましばしありてといへばつながねばのどけき舟もかたきかな風のこころをわれにのどます（繋いでいないと、長閑な舟だって危ないのですよ。私に風を鎮めさせようというのですね）

確かに、ある女性との歌の贈答に際し、匡衡は「繋がぬ舟」という歌語を意識している。和泉の「観身論命」歌群（和泉式部集二六八～三一〇、重出三六七～三九一）が想起されるのも無理からぬことではある。和泉のこの歌群は、寛弘四年一〇月二日、敦道親王薨去後に詠まれた連作と考えられる。その主題はまさに「観身岸額離根草、論命江頭不繋舟」（『和漢朗詠集』「無常」羅維）の詩句に集約されるもので、「無常」と言う以上に、自らの存在を反照するべき他者を失った寄る辺なさ・孤独感を、綿々と綴ったもの[16]である。が、この詩句について言えば、永観二年（九八四）成立の『三宝絵詞』（上巻冒頭序）にも引かれ、相当程度人口に膾炙していたことが窺われる。したがって、匡衡詠を直ちに和泉の歌群と結びつける訳にはいかない。

歌に即して言えば、右の二首は「繋がぬ舟」とその対語とも言うべき「のどけき舟」を強く意識している。このことからすれば、『全釈』では触れていないが、先行する『小馬命婦集』巻頭歌（東山逍遙歌一〇首中の第一首）を無視できないのではなかろうか。

水のつらにふようにて捨てたる舟あり
たとへつつ岸のほとりに身を捨ててつながぬ船ものどけかりけり　（小馬命婦集一）

上下句に渡り明らかに「観身論命」の詩聯を踏み、同時に「のどけき舟」を歌う。

小馬命婦は、生没年未詳だが、円融天皇中宮媓子（天延元年（九七三）二月入内）に出仕し、天元二年（九七九）六月三日、中宮の崩御後に尼となったとされる。歌集はこの頃自撰された[17]か。既に嘆老の思いが明瞭である。正暦頃までの生存が知られる。したがって、天暦六年（九五二）頃の生まれの匡衡よりは、二十才程年長の歌人といっていいだろうか。匡衡詠に先行する

ことはほぼまちがいない。いずれにしても、小馬命婦のこの一首の存在は、和泉「観身論命」歌群を前提とせずとも、匡衡の一首が詠まれ得たことを示すことになろう。

より根本的に、103のように、条件付きであれ一方に女を「のどけき舟」に準える状況は、和泉の「観身論命」歌群の主調とは、相容れないのではなかろうか。例えば、関連ありとして引かれた「観身論命」歌群の歌は次の二首だが、他者の介入を峻拒するかに、自己の不安な実存を見つめる体のものである。

なにはがたみぎはのあしにたづさはるふねとはなしにある我が身かな　（集観身二八四）

ろもおさで風にまかするあま舟のいづれのかたによらんとすらん　（集観身二九四）

両者の基調の違いは明らかなのではなかろうか。何故、敢えてこのような「歌群」に、匡衡が「つれづれ」に任せて「遊戯的」に詠み掛ける必要があったのだろうか。そもそもの動機において、不可解と言わざるを得ない。

なお、102歌の上句について『全釈』は、「塵が隠している、昔の私との関係が深いものだったならば」とし、和泉式部の次のような歌を関係歌として挙げる。

人にあひてものいひし所を、ひごろほかにありてきてみれば、いたうちりばみたるをみて、いひやる

あふことのありし所をきてみればさしも思はぬ塵ぞゐにける　（集二〇八・続集二二九）

ほどふれば人はわすれてやみにけむ契りし事を猶たのむかな　（集観身三〇〇）

すなわち、現世の範囲での二人の恋愛を想定して関係づけるのだが、匡衡詠の「塵隠す先の契り」は、単なる昔の契りではなく「先の世の契り」の謂ではなかろうか。「塵が覆い隠している五百塵点劫も前の世からの因縁」の意と解したい。その点では、ここでも和泉前掲歌を引くよりも、例えば『赤染衛門集』為基歌群の次の贈答歌の方が参考になろう。

おなじ人わ（っ）らひしころ、薬王品をてづからかきて、これかたみにみよ、くるしきを念じてなむかきつる、のちの世にかならずみちびけといひたりしに

此世より後の世までと契りつる契りはさきの世にもしてけり　（赤染集一三）

かへし、ためもと

ほど遠き此よをさしていにしへにたれことでしてまづ契りけん　（同　一四）

次に、「観身」歌群に関連ありとされる残りの一首を見る。

④104君さ（林校訂ーの）らばわれもおくれじあまを舟みるめとともにとしをつみつつ

上句は、「波ながら袖ぞぬれぬる海人小舟のり遅れたるわが身とおもへば」（古今六帖二）に依るか。初句「君さらば」か

らは、出家を口にする相手に対して贈る体の歌と判断される。これに対応するとされる和泉の歌は次の一首。

櫓もおさで風にまかするあま舟のいづれのかたに寄らんとすらん　（集観身二九四）

「かた」は「方・潟」を掛ける。この歌からは、例えば和泉の次の歌が連想されようか。

舟寄せん岸のしるべも知らずしてえもこぎ寄らぬ播磨潟かな　（集八三五）

「播磨の聖のもとに」と題して「冥きよりくらき道にぞ…」（集八三四）に続いて置かれる歌である。両者共に、「舟」「かた」「寄る」の修辞を同じくする喩歌であり、明らかに、出家も成らず「寄る方」に迷う歌である。

えこそなほうき世とおもへどそむかれぬおのが心のうしろめたさに　（集観身二九八）

右の歌にも見るように、「観身論命」歌群全体が、まさに「不繋舟」の寄る辺なさ、出家に踏み切れない心の揺らぎを主題としているのであり、「君さらば」と言われるほどの出離への決意を示している訳ではない。

104の下句もまた、姿を変えても末永く見届けようとの意味で、これまでの持続的関係の経過を思わせるものである。匡衡周辺で、例えば中将尼の出離に際して、匡衡が歌を贈ることがなかっただろうか。『全釈』では『匡衡集』77～79の贈答歌を、出家後の中将尼（匡衡四十二歳頃を想定）を見舞ったものかとし、詞書を欠く中将尼歌群冒頭歌77の前に脱落を想定している。なお、状況は異なるが、『匡衡集』84中将尼の歌に「年を積む」の歌句を見る。

84あひおひのわかなはおほしかすがのにとしばかりをぞつまばつむべき

以上が「観身論命」歌群に「宛てた」とされる三首の検討である。これらのことからは、和泉の歌を前提にしたとする根拠は見出しがたい。またこの三首を一連のものとして考える必然性はない。「観身」歌群全四十三首に対し問題とされた匡衡詠はこの三首に留まり、「観身論命」歌群全体がその視野に入っていたとは考えがたい。

三、『匡衡集』と〈和泉式部続集日次歌群〉
―『匡衡集』105～113の検討―

次に、「対応する（和泉の）歌への問いかけ、批評、または返歌」になっているとされる『匡衡集』105から113最終歌までの九首について、『和泉式部続集』日次歌群（五七六～六四七71首）との「対応」関係について検討したい。主として五九九までの二四首が問題になる。

最初に、氏の所論の契機になったと推測される二首を取り上げる。

⑤　人に

105 月影の駒の主にやたれならむあなおぼつかなそらの気色や（月影の中を鹿毛の駒に乗って来た人なのか、誰なのだろう。空模様のようにはっきりせず、気になることだ）

106 月影のさやかながらにかへさじとくもらぬ空のことにつくらむ（月の明るい内に帰すまいとして、曇らない空の事を持ち出すのでしょう）

105は続集日次歌群五七六、106は同五七八に「対して詠まれている」かとされる。

けふはいつよりも空のけしき、物憐におぼえて

くれがたにをちの山辺は成りにけりいとどばかりにこまとどむらん　（続集五七六）

と思ふほどに、月もいでぬれば、空もこころをしるにや、おぼろなれば

やどらでもこよひの月はみるべきを曇るばかりに袖のぬるれば　（続集五七七）

とひとりごつを聞き給ひけるぞ、わりなきや

おもひしる事ありがほに月影の曇るけしきのただならぬかな　（続集五七八）

確かに、「空の気色」「月影」「駒」「曇る」の語句が共通で、「おぼつかな」「おぼろ」等の用語も近似するが、これらは日次歌群冒頭に位置するかとされながら、読みが定まらない部分である。五七六と七との間に、待っていた男性がやって来て二人の間に交わされた贈答歌が、後の二首だとする説、あるいは、五七六の心内詠、せめてともに月を見たいのにと呟く五七七歌と物思う風情の女に対し、からかい気味に問いかける貴人の歌五七八と見る説もある。氏が関連ありとする二首の間には五七七歌があり、一方、106に関わるとされる五七八は、和泉の歌ではない可能性がある。抑もこのような状況で詠まれた和歌に、「問いかけ」「対して」詠む行為とは、一体何なのであろうか。

105について林氏は、「（いとどはかりに駒とどむらんと君が待っているのは）月光の中を馬にまかせてやって来る男なのか。一体誰なのだろう。…」と、和泉五七六歌を組み込んで訳している。が、少なくとも五七六の歌は、「夕闇は道も見えねど旧里はもと来し駒にまかせてぞ来る」（後撰・恋五・九七八、古今六帖・大和物語五六段）の歌を踏まえ、男の今宵の宿りに思いを巡らす「くれがた」の歌である。五七六から「月光の中をやって来る男」を想定する根拠は全くない。

105は、女の元を訪れた他の男の正体を、女にやんわりと尋ねた歌ではなかろうか。「月影（鹿毛を掛ける）の駒の主」なのか、誰なのかと言う問い方からして、「鹿毛の駒の主」は匡衡にとって既知の人物らしい。それは例えば、次の歌を送った相手のような人物ではなかろうか。

ほどへて月のあかきにきたるに、かたたがへおはせしかば、びんなうて、かへして、つとめ（てカ）やりし

帰りけん空はいかにぞ月かげのやどをすぎしも哀とぞ見し　（赤染集24）

返し

有明の月や我が身とおもふまで見しにかなしく成りし空かな　（同　25）

赤染衛門と大江為基が交わした歌の中でも、後々まで思い返された歌で、これなどは、匡衡にとっても心穏やかではいられなかったものではなかろうか。月影を「鹿毛」と掛けて解せる歌でもある。このすぐ後には、やはり為基へ返した赤染の歌中に、「空のけしき」が使われている。

夜とともにながむる空のけしきにてしぐるる程もしりぬべきかな　（同　27）

要は、敢えて和泉の「日次歌群」を前提とせずとも、匡衡の実生活からも十分生じうる表現であろうということである。逆に、赤染・為基の間に交わされた贈答歌は、匡衡のみならず和泉も目にする機会があったかとも推測される。

⑥107おとにきく音羽のたきの白糸をむすばばいかにこなたよわれり

「あなたが噂の人と契ったらどんなに落胆することか」の意。古今歌「山しなのおとはのたきのおとにのみ人のしるべくわがこひめやも」（墨滅一一〇九）に依る。次の日次歌群歌と関連付け、大津にいる和泉の恋人に嫉妬して詠んだ歌とされるが、迎えての解。

十日、もしもやとて、かの大津に人やりたれば、唯今ありつるとて、あるをみるにも

おもふ人おほつよりとぞきくからにあやしかりつる袖のぬれぬる　（続集日次五八三）

これも例えば、赤染衛門と三河守時代の為基との関係を背景として詠まれたものと見る方が、まだしも蓋然性があるのではなかろうか。

⑦108人しれずつつむ涙にこぼれいづるおもひ（底―にしり・林校討―みし日）ながらに程をふるかな（包み隠していても泣き流す涙となって〈氷って〉こぼれ出るあなたへの思い、その思い〈の火〉を抱えたまま時を過ごしていることだ）

これは、和泉の次の二首を「対象にし」たもので、「（重陽の折から、私の袖がぐっしょりと濡れているのを、菊の露と他人は見るでしょうかと君は訊くが、）人に知られないように隠している涙がこぼれ出て、恋心はとうとう表れてしまったよ。恋しい人と逢った日のままの髪型で、幾日もすごしているのだね」の意とされる。

九日、わたおほはせしきくをおこせて、みるに、露しげければ

をりからはおとらぬ袖のつゆけさをきくのうへとや人のみるらん　（続集日次五八一）

ひさしくなりぬ、御ぐしまゐらんといふ、いらへはあやしや

いとどしくあさねのかみはみだるれどつげのをぐしはささまうきかな　（続集日次五八二）

しかし、108を重陽の九日の歌と見る根拠は歌自体には全くなく、「涙にこぼれいづるみし日」の続きも不自然である。

この歌は公任集の次の歌を前提に考えた時に、その意味が明確になるのではなかろうか。

女のもとに

人しれずつつむおもひのあまる時こぼるといふは涙なりけり　（公任集二一三）

匡衡詠第四句中の「にしり」は、「みし日」と訂するよりもこの公任詠との関係から「おもひ」の誤写と取りたいところ。詠まれた時期は不明ながら、「涙」を定義づけるかに詠う公任詠が先行したと見るのが穏当であろう。「火」「氷」の機知的取り合わせの趣向を借りつつ、公任詠を裏返してみせる。日次歌群五八一・五八二と関連づける必然性はない。

⑧109しのびしに心のかぎりつきにしをあやしやなにのものはおもふぞ（密かに思い焦がれて心の限りを尽くしてしまったのに、一体、自分は何を未だに思い煩っているのだろう）

第三句中の「つく」は、言われるような「憑依」の意なのであろうか。『全釈』は、「身は此処にあるのに、心だけが和泉式部の所へ勝手に行ってとり憑いてしまったが」とし、下句を「君はこのうえ、なにのもの思いをするのだろう」と釈すが、不審。

「つきにし」は、「尽きにし」で自己の体験的事実を示す。一貫して自身のことを内省的に詠ずるもので、人に贈れば恋情を訴える歌となろう。挙げるとすれば、和泉の次の歌と相似た発想である。

ものおもふころ、あるやうある人に

身のうさをしるべきかぎりしりぬるを猶なげかるる事やなにごと　（集六八五）

なお林氏の論は、下句「ものはおもふ」が、日次歌群全体に対応すると見ることから、発している。確かに日次歌群の、特に五九五以下には「もの思ふ」とその類語が目に着く（六一二・六一四・六二八・六三三・六四七）。歌群の最終歌六四七「ありはてぬいのちまつまの程ばかりいとかく物をおもはずもがな」が端的に示すように、当歌群の主題は「もの思ふ」という語に集約される内省的なもので、その詞書のありようも対詠性を閉ざすかに展開する。[18] このような歌群に「宛て」て、何故、これも自問の体の歌を詠むのであろうか。「対応する（和泉の）歌への問いかけ、批評、または返歌」とは考えにくい一首である。

⑨110いさよひの月の光のさしくもりしぐれごこちのまだきするかな

これと関連有りとされるのは、次の一首である。

よそにてもおなじ心に有明の月みばそらぞかきくもらまし

（続集日次五九九）

「いさよひの月」と「有明の月」を同定するべく氏は論を進められるが、それ以前に、「あの人が、自分と同じ涙がちの心境で有明の月を見ているのであれば、空もかき曇るだろうに（実際は曇っていない）」と、共感の成り立ちがたい状況を嘆く和泉詠に対し、匡衡詠は、射しては曇る十六夜の月の有様から、時雨の時期の侘びしさを早々と予感するという趣向の歌である。両歌はそもそも対応しないと言わざるを得ない。

歌語「時雨ごこち」を媒介にするならば、むしろ次の一首に注目するべきであろう。

（十月）二日、ひまなくあはれなる雨にながめられて

今日は猶ひまこそなけれかきくもる時雨ごこちはいつもせしかど

（続集日次六〇八）

しかし、これも次の先行歌があってのことである。

大空はくもらざりけり神な月時雨ごこちは我のみぞする

（拾遺集・雑・読人不知、貫之集六一一）

110歌が、この拾遺集歌を直接踏んで発想されていることは明らかであろう。

⑩111岩まより生ひたる松の二葉にてねながきものといかでなりけん（岩の間から生え出た松は、未だ双葉なのに、どうして根が長く――あなたへの思いが堅固に――なったのでしょう）

112かねたらばわすれましやはいはのまつのべに我が身はいでぬばかりぞ（「万世予て」種を蒔いた岩の松ですから、忘れたりしませんよ。ただ野辺いや述べに出かけないだけのことで）

「岩の松」関連二題。『古今集』所収の、読人知らず歌を原拠とする。

種しあれば岩にも松はおひにけり恋をしこひばあはざらめやは

（古今・恋一・五一二）

『全釈』は、111歌を和泉「六八四に対して詠まれた歌」とし、一対の贈答歌として解釈しているがどうだろうか。六八四は日次歌群外の歌である。

久しうとはぬをいかにおもふらん、といふ人に

岩の上のたねにまかせてまつ程はいかに久しき物とかはしる

（集六八四）

無沙汰を詫びる男の言葉を受けて、「あなたの心に任せて待っていると、どんなにか時間が長く感じられることか」と詠んだもの。周知の道綱母歌を踏む。「匡衡は『久しきもの』を『根長きもの』の意に変えてからかったもの」と『全釈』は言うが、少なくとも、和泉歌の詞書を包摂する形では、成り立ちえない解釈である。

「根長き」は、「深き心」「長き心」の喩として、思いの深さ、確かさを示す事が多い。

あやめぐさねながきとれば沢水の深き心はしりぬべらなり
（貫之集二二七）

君がためたまつくりえのあやめぐさひけるねながきこころともみよ
（輔親集一一〇）

即ち、当歌は「恋初めて間もないのに、どうして思いがこんなに堅牢なものになったのか」と、自問する体の歌と見られる。時間の長さを言うのではない。これも和泉六八四歌とは無関係であろう。

次の112「かねたらば」の歌は、間遠な訪れに「お忘れか」と恨む相手への弁解。初句は、次の古今歌を踏む。（上句は先の六八四歌とほぼ同一）。

梓弓いそべのこ松たが世にかよろづ世かねてたねをまきけむ
（古今・雑上・九〇七）

これは、和泉の次の歌と関連づけられている。これも日次歌群外の歌である。

正月ねの日に
岩の上の種にまかせてみる程にけふも小松をひく人もなし
（集八五七）

匡衡詠と、意味内容は粗々対応するかに見える。が、これも「岩」の「松」以外に言葉の上での対応は見られず、子の日の歌の類型歌として偶合の範囲を出ないとも言える。

因みに、「岩の上の松」は、赤染・匡衡夫妻の間でしばしば浮上する歌材である。例えば、『赤染衛門集』には次のような歌がある。

おもひうたがふにやがてやる
かたかりし岩にねざせる松のうへにはかなき露な結びおかせそ
（赤染集八六）

かへし
たねまきて松ぞさびしき岩の上にねざしてのみやまたんとすらん
（赤染集八七）

これは『匡衡集』にも重出する（29・第二句「いはねにさせる」）が、詞書は「おほやけどころにて、人をかたらひて」とある。関係が生じてまもなくのことであろう。111等は、この歌に続く位置にあったとしても、さして違和感を感じさせないのではなかろうか。

⑪113秋風にこゑよわり行くすずむしのつひにはいかにならむとすらむ

匡衡の代表歌で、年代順にも、巻末に相応しい一首として配されたという指摘がある。

風さむみ声よわり行く虫よりもいはで物思ふ我ぞまされる
（拾遺集・恋二・七五一・読人知らず。異本忠岑集四一）

身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかがなるとしるべく
（古今・雑体・一〇六四・興風）

右の勅撰集二首を上下句それぞれに引用し、「鈴（虫）」「鳴ら

(む)」と縁語掛詞の技法で結びつけた趣向歌である。『賀茂女集』七六「おもふにはなることなしとすずむしのこゑふりたつる秋ぞかなしき」、あるいは『和泉集』四八「すず虫のこゑふりたつる秋のよはあはれに物のなりまさるかな」など、同様の修辞技巧は当代の他歌にも見られる。

『後拾遺集』の「秋上」に入集するこの歌は、単純に鈴虫を詠じた秋歌とも解しうる。また上句を喩的な序と見て、自身の行く末への不安を詠じた述懐歌と見ることも可能であろう。その場合は自問の体の歌となる。

関連が指摘される和泉日次歌群の歌は、「虫」と移ろいを扱う点では相似るが、「ねになく（鳴く・泣く）」を掛詞とする明瞭な人事詠で、先の趣向とは異なる。

うちくもる空のけしき、むしのねよりも、うちそへつべき心地して

あけくれにすぎゆく秋もいつまでと聞ゆる虫のねにぞなきぬる　（続集日次五八九）

五日、あか月めをさましてきけば、かしかましきまでありしむしのおとせぬに

ねをだにも今はなくべきかたもなしまぎれし虫のこゑ絶えぬれば　（続集日次六〇〇）

一体、匡衡集の当該部分は、冒頭に挙げられた匡衡詠105・106あるいは112などは、確かに相手に呼びかける体の歌で対詠性が強いが、その他の歌は概して述懐的、独詠的なのではなかろうか（詞書が簡略で答歌を載せないという特徴も、これと関わるか）。109にしろ113にしろ、日次歌群との内向きな同質性を指摘しえても、相互の対詠関係を想定するのは困難ではなかろうか。先述の通り、そもそも対詠性を封じるかに、詞書中に引き歌を駆使して、独詠的に展開したのが日次歌群であった。

四、和泉式部の詠歌環境一面

以上、『匡衡集』末尾十四首の検討の結果からは、古歌の直接的な取り込み、同時代歌人の私家集からの摂取、個人史的な背景を窺わせるものなどが浮上してくる。即ち、和泉式部および和泉式部二歌群との、言われるような形での影響関係は想定しがたいことが、粗々ながら見えてきたかと思う。

それにしても、林氏の論が導き出したように、両者の歌には用語・心象の類似など一面の共通性はあると言うべきであろう。が、どちらからどちらへの影響なのかは、即断できない。[19]『全釈』でも、100以前の歌では、例えば年代順とされる『匡衡集』の巻頭歌について、その歌句「心のうちのまつ」を「後年和泉式部と相模が真似ている」ことを指摘している。他にも22「息の緒」（万葉語）が、『和泉式部集』八九、『伊勢大輔集』一五二・一五三に「僅かに見られる」こと、35（後拾遺・赤染集にも）が、和泉二〇七「今宵さへあらばかくこそおもほえめけふくれぬまの命ともがな」と同一趣向であることが指摘されている。

また42の用例として引かれた後拾遺歌「よそにふる人はあめとやおもふらんわがめにちかき袖の雫を」は、同集では「西宮左大臣」詠とされるが『和泉式部集』所収歌五四五である。

他にも用例の少ない歌句で両者に共通するものとして、55「道の空」が、和泉集八六五・一三五（重出）「朝ぎりにゆくへもみえずわがのれるこまさへみちの空にたちつつ」、60「たえもこそすれ」（赤染集六一）が、和泉集五二六「このふしにたえもこそすれまゆごもりいとすくなくもひきでたるかな」、89「心ちやはせし」が、和泉集一八三（赤染集一八四）「わかれてもおなじ宮こにありしかばいとこのたびの心ちやはせし」、万葉歌句の97「こころはきみに」が、『和泉集』四五六「しめのうちをなれざりしよりゆふだすき心はきみにかけてしものを」にというように、日常詠の何気ない言い回しの中に使われているのである。

極く単純に言えば、年齢的に一世代上の匡衡から和泉への影響の方が、特にその早い時期においては自然ではなかろうか（受けた影響が後年にまで及ぶ可能性を否定するものではない）。大江氏諸系譜に位置付かない和泉の父「雅致」（拾遺集）が、匡衡弟であった可能性[20]も言われ、匡衡男挙周と和泉の妹も一時夫婦関係にあった。また妻赤染衛門が、和泉の親身な相談相手であった[21]ことも、和泉式部家集等から知られる事実である。大江為基を含め、同族として共通の生活圏にあったとすれば、当然詠歌の基盤[22]も重なってこよう。論証の過程でも具体的に示したが、赤染衛門が大江為基（維時孫。匡衡とは従兄弟の関係）あるいは匡衡との間に交わした歌々を、和泉が目にするような機会はあったとみるのが穏当であろう。和泉に「宛て」るのとは逆の影響関係の可能性を言いたいのである。

一例を挙げる。見てきたように、晩秋から初冬に掛けての「空のけしき」、就中、「月と時雨」の採り合わせへの拘りは、両者に顕著な傾向のようである。先に、匡衡110「いさよひの月の光のさしくもりしぐれここちのまだきするかな」を見たが、他にも『匡衡集』には、「月と時雨」の織りなす景に寄せた次のような贈答歌がある。

十月のつきのあかきに、女と物がたりしてゐたる、又、くもらずながら、しぐれのあらかにしたれば、女

26月影をかくながらにてしぐるればおつる紅葉の音かとぞきく

といひはべる返ごとに

27つきももりしぐれもそそく宿もせに何にか袖をまづぬらしつる

これとよく似た「月と時雨」の情景を、周知の『和泉式部日記』「十月十日ほど」の、手枕の袖の場面にみることができる。

一夜の空の気色のあはれにみえしかば…それよりのち心苦しとおぼされて

と、「女」と宮の関係に一転機をもたらすことになったその夜の「空のけしき」は、

つきはくもりくもりしぐるるほどなり。わざとあはれなる

ことのかぎりをつくりいでたるやうなり

と、「射し曇り」の状態であったとされる。このような中で宮が「女」に詠みかけた

時雨にも露にもあてで寝たる夜をあやしくぬるる手枕の袖

も、27匡衡詠の趣向に通じるものがある。両者に影響関係を見るとすれば、初期の赤染関係歌群に属する匡衡集26・27が、長保五年四月以降を描く『日記』に先行するのは自明である。

景物としての「時雨」は、「神な月ふりみふらずみ定なき時雨ぞ冬の始なりける」（後撰・冬・四四五）のように、十月の、「定めなき」ものとしてその特性が捉えられ、また「紅葉」との採り合わせが注目されるものの、「月」と採り合わせた興趣が詠われることは、当代までは勿論、後にも多くはない。わずかに「時雨ふるあか月つきよひもとかで君をかなしとをらましものを」（古今六帖・三六八・貫之）、（「秋のよの月おほにみゆるをぐらやまいとどしぐれのふるぞあやしき」千穎集三五）のような例が挙げられる。また、詠まれる場合も、「ひさかたの月のまどかになるころはもみぢはすともしぐれざらなん」（伊勢集三〇九）、「九月十三夜、時雨はしながら月のあかかりければ、あやにくにしぐれくらせど名にたかきこよひの月はくもらざりけり」（伊勢大輔集三八）のように、「時雨」はむしろ月の美を阻害する物として、対立的にすら扱われる。歌題としては、下って公重『風情集』に「時雨間月」を見る程度である。

「空のけしき」ということば自体が歌に使われ出したのは天暦頃からで、私家集では『中務集』（西本願寺本）八〇「はるさめにそらのけしきをつつめどもけふのこまつはなほぞひきつる」が早い例となろうか。『馬内侍集』詞歌三例などが目につく。勅撰集では『後拾遺集』初出。当初は春の空に対して用いられることが多く、次第に秋から冬の景にも使われるようになる。が、散文語的な所為か当代和歌での用例は意外に少ない。その中では、「しぐれ」と採り合わせた『赤染衛門集』為基歌群中の赤染詠が、天元の頃のもので早い例となろう（既出。⑤105の項参照）。

しぐれいたうふる日、おなじ人

神無月いまはめなれてつげずともしぐるるだにも空にしらなん　（赤染集二六）

返し

夜とともにながむる空のけしきにてしぐるる程もしりぬべきかな　（赤染集二七）

『和泉式部日記』では、「手枕の袖」に先立つ、九月下旬「暁起き」の場面[23]にも、「空の気色」の語が使われている。「時雨れんほどの久しさも未だ来」（⑨110の項参照）の時期として認識され、「月」と採り合わせられるのは「霧」である。

九月二十日あまりばかりの有明の月に、御目さまして…

…女は寝でやがて明かしつ。いみじう霧たる空をながめつつ、明かくなりぬれば…と思ふよりも、「なほ折節は過ぐし給はずかし。げにあはれなりつる空の気色を見給ひけ

る」と思ふに、をかしうて、この手習のやうに書きゐたるを、…〈手習い文〉……とのみして明かさんよりは、とて妻戸をおしあけたれば、大空に西にかたぶきたる月のかげ、遠くすみわたりて見ゆるに、霧りたる空のけしき、鐘の声、鳥の音ひとつにひびきあひて、さらに過ぎにし方、いま行く末のことども、かかる折はあらじと、袖のしづくさへあはれにめづらかなり

われならぬ人もさぞ見ん長月の有明の月にしかじあはれは

後年の詠となるが、『赤染衛門集』に次の一首を見る。

十月にありあけの月のいみじくあかきに、にはかにかきしぐれ、またうちあかりつつあはれなるを、ひとりながめて

神無月有明の空のしぐるるもまたわれならぬ人やみるらん　（赤染集五九六）

和泉式部においては「空の気色」の全用例が、続集日次歌群の詞書に集中する。五七六・五八六・五八九・六〇六・六四〇の五例である。五七六・五八九については既に触れた。残る三例は以下の通りである。

くれぬれど、おくへもいらで月みるほどに、夜はあけぬるなるべし、空のけしきあはれなるにも

まどろまであかしつるにもいましこそ野辺にやどれる露もおくらめ　（続集日次五八六）

くれつかた、霧たたずまひ、そらのけしきなど、あはれしれらんとて

いまはとてたつきりさへぞあはれなるありしあしたの空にたれば　（続集日次六〇六）

今日はことにあれたる空のけしきをみる人人も、この月はかむわざなればぞかし、などいふをきくにも

あられふるかひやなからん神山のまさきのかづらくる人もなし　（続集日次六四〇）

日次歌群が如何に晩秋から初冬に掛けての「空の気色」の醸す「あはれ」に意識的であったかが知られる。

改めて言うならば、ここで問題としたのは、日次歌群と『和泉式部日記』の成立時期の先後ではない。[24] それらに見られるこの時節の景と心象の結合への格別の関心を、和泉が、他ならぬ赤染・匡衡・為基らの若い時期の詠草を通じて呼び覚まされ意識化していった可能性についてである。一例に過ぎないが、和泉の歌にとってその意味は小さくない。これについては、例えば尾高直子氏[25]が寛弘期の彰子サロンでの詠歌傾向について指摘されている事などとも考え合わせ、より多面的に考察されなければならない。

以上、不十分ながら、林氏の御説に導かれて、『匡衡集』末尾十四首から和泉の詠歌環境の一半を窺う可能性を追ってみた。

注

（1）　関根慶子・阿部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子『赤

染衛門集全釈』（風間書房　一九八六）

（2）林マリヤ『匡衡集全釈』（風間書房　二〇〇〇・八）

（3）林マリヤ「和泉式部と大江匡衡」（『中古文学』六三号　一九九九・五）

（4）森田兼吉「和泉式部続集日次歌群の方法」（『論集 和泉式部』笠間書院　一九八八）、小野美智子「和泉式部続集日次歌群の成立年次考」（お茶水女子大『人間文化研究年報』一九九三・三）、清水好子『王朝の歌人6　和泉式部』（一九八五）、拙稿「和泉式部続集日次歌群の成立試論」（『中古文学』六二号　一九九八・一一）、藤岡忠美「和泉式部『日次歌群』成立考」（『国語と国文学』二〇〇〇・一）など

（5）後藤祥子『和歌文学大系20　月報9』（明治書院　二〇〇〇・三）

（6）藤岡忠美『平安朝和歌――読解と試論――』（風間書房　二〇〇三・六）

（7）山岸徳平『和歌文学大辞典』項目　一九六二、木越隆『私家集大成中古Ⅰ』解題　一九七三、山口剛『和歌大辞典』項目　一九八六、小町谷照彦「大江匡衡の和歌――儒者における和歌の意味――」（『成城大学短期大学部紀要』一号　一九六五・一）

（8）斎藤熙子「中将尼考――匡衡・赤染・挙周との関わりをめぐって――」（『和歌文学新論』（明治書院　一九八二・五→『赤染衛門とその周辺』）

（9）北村杏子「大江匡衡集の一考察――赤染衛門集と関連させて――」（『平安時代の和歌と物語』一九八三）

（10）林マリヤ「『匡衡集』から見た大江匡衡の素顔」（『並木の里』四二号　一九九五・六）

（11）注2・3参照。

（12）久保木哲夫「贈答歌の方法をめぐって――歌物語の場合――」（『国文学論考』一五　一九七九・三）

（13）大曽根章介「大江匡衡――儒者の生涯――」（『漢文学研究』第十号　一九六二・一〇）、松村博司「尾張の国における大江匡衡と赤染衛門――摂関時代の儒官受領夫妻の生活――」（『栄花物語の研究』第三　桜楓社　一九六七）、今浜通隆『武蔵野日本文学』五・六号（一九九六・九）、後藤昭雄『大江匡衡』人物叢書（吉川弘文館　二〇〇六）

（14）久曽神昇『平安稀覯撰集』（古典文庫　一九五二）

（15）注6　藤岡前掲書　前編第二章3・4節　ほか

（16）拙稿「和泉式部集『観身岸額離根草、論命江頭不繋舟』の歌群に関する考察」（『国文学研究』七三集　一九八一・三）

（17）藤本一恵・木村初恵『深養父集・小馬命婦集全釈』（風間書房　一九九九）

（18）拙稿「和泉式部続集日次歌群の方法と表現性――後撰集

雑四との関わりから―」（『国文学研究』一二二集　一九九七・六）

(19) 先後を考える目安として、④⑨のように、匡衡詠の方が先行古歌をより直接的に取り込んでいることがある。

(20) 岡一男『源氏物語の基礎的研究』（東京堂書店　一九六五）

(21) 赤染衛門集一八一（和泉集三六四）・一八三（和泉集一八二）など。

(22) 拙稿「和泉式部の詠歌環境―その始発期―」（『国文学研究』七一集一九八〇・六）

(23) 大斎院御集一一六～一一八の「おなじ十九日夜、あかつきちかうなるまでながむるに、そらのけしき、風のおと、すべてすべて、きしかたゆくさきかかるよあらじとおもふにものおぼえず、いかがはせんとて」で始まる大輔・中務の掛け合いに酷似の記述が見える。他にも源氏物語中の数例など注目されるものがある。

(24) 表現の類似は必ずしも成立時期の近さを意味しない。日次歌群早期成立説には、常に、より後期の成立説が論拠とする後代的要素への論駁が求められよう。

(25) 尾高直子「和泉式部集『日次歌群』の表現―歌語「みどりの紙」「風の音」から―」（『和歌文学研究』八十九号　二〇〇四・一二）

くぼき　としこ（日本文学）

Toshiko KUBOKI : A Study on Masahira Syu
——in relation of Izumishikibu-Kashu——